

## み言葉の飢饉

アモス書8章

見よ、わたしがききんをこの国に送る日が来る、それはパンのききんではない、水にかわくでもない、主の言葉を聞くことのききんである。(11)

幻を見せられたアモスは、「何を見るか」という問いに対して、「夏のくだもの(カイツ)」と答えます。それに応じて主は「わが民イスラエルの終わり(ケーツ)がきた」と言われました。これは一つの言葉遊びになっていて、夏の終わりにこれらの果物が収穫されるように、イスラエルの夏もほとんど終わりに近づき、ついに審きの日が来たことを告げられたのです。このような危機にあつてもなお人々は地上の生活のことばかりに心が奪われ、「新月はいつ過ぎ去るだろう、そうしたら、われわれは麦を売り出そう」(5)と論じていたのです。そこで主はやがてイスラエルを襲う飢饉について語ります。「見よ、わたしがききんをこの国に送る日が来る、それはパンのききんではない、水にかわくでもない、主の言葉を聞くことのききんである」。神の民イスラエルにとつての最大の苦しみは、命の源である神の言葉が聞けなくなることでした。信仰生活の基本原則の一つは、神が語られる言葉に聞き従うことにあります(申命記8:3)。神の言葉を失うとき、信仰者は死んだも同然となつてしまふのです。

物質的な繁栄に惑わされて、霊的にはいよいよやせ細っている今の時代にあつて、わたしたちは被造物として、命の源である神の言葉を慕い求めようではありませんか。